

五条川流域の河道変遷と 岩倉の歴史景観

● 蔭山 誠一・鬼頭 剛・
鈴木正貴

岩倉市周辺における愛知県公文書館所蔵明治17年作成の地籍図にみられる土地利用と現在の表層地形の解析を行い、縄文時代から江戸時代にかけての古地形の変遷を検討し、7条の旧河道の流路について復元した。そしてこの旧河道の復元案と岩倉城遺跡の発掘調査成果に基づき、岩倉城が存在した戦国時代の歴史景観を復元した。

1. はじめに

本稿では、五条川流域の古地形の変遷を検討し、その解析結果を基にして岩倉城が存在した戦国時代の歴史景観を復元するものである。今回分析の対象とした地域は岩倉市全域、一宮市南東端部、江南市南端部、小牧市西端部、北名古屋市北西部の地域（以下岩倉地域と略す）南北約9.5km、東西約5.5kmの範囲である。

愛知県埋蔵文化財センターでは、これまでに当該地域において、岩倉城遺跡をはじめ、猫島遺跡、権現山遺跡、伝法寺野田遺跡、御山寺遺跡、町屋遺跡、下新田遺跡について発掘調査を行ってきた。これらの遺跡からは縄文時代中期末葉から江戸時代にかけての遺構と遺物が確認されており、それらの変遷の検討から、周辺の遺跡との関係が述べられてきた。また、石黒立人は明治20年代の地図から分析を行い、伊勢湾沿岸地域の沖積地にある遺跡と地形との関係について検討した（石黒2006）。この中で弥生時代中期の濃尾平野北東部の海岸線を復元し、岩倉地域に限ってみれば、水田域の分布から、現在の五条川の西で南北にのびる河道と北東から南西にのびる河道が推定されている。また伊藤秋男は濃尾平野の古墳について地籍図に残されている古墳の痕跡を検討し、特に岩倉地域の北名古屋市鍛冶ヶ一色町にある高塚古墳の存在を基にして、現在の五条川は古墳時代に流路変更がなされたものである可能性を指摘した（伊藤1994a・1994b）。このように各遺跡の遺構・

遺物の変遷には、当時の社会情勢の変化と自然環境の変化とが深く関係しているようであり、旧河道の変遷を探り遺跡との関係を分析することは、地域の歴史景観を解明する上で重要な視点を提供できるものと思われる。そこで今回の分析では、明治17年（1884年）作成の地籍図にある土地利用のあり方と現在の表層地形の起伏状況、遺跡の分布と遺構のあり方を併せて考え、五条川流域の河道の変遷と岩倉地域の歴史景観の復元を目指すものとする。（蔭山）

2. 地籍図の分析

（1）地籍図による地形の分類方法

岩倉地域について、明治17年作成の地籍図を図化し、解析を行った*。今回解析を行った地域は、木曽川の本川扇状地（犬山扇状地）の南西端にあたり、その北側では扇状地の微高地と谷地形を現在でも明瞭にみることができる。

まず地籍図における地形分類として低地部（群）と微高地（群）を分けるため、地籍図にある水田・草生などの幅50m以上、長さ100m以上に及ぶものを低地部として認識した。そして水が関連すると思われる複数の低地部をさらに低地群として分けた。微高地（群）については、帯状に大きくひろがる低地部と対

* 愛知県公文書館所蔵の明治17年作成の地籍図を図化した範囲は次の通りである。江南市：小折村・曾本村、一宮市：北小淵村・南小淵村・浮野村・一色村・穂積塚本村・加納馬場村・佐野村・芝原村・天摩村・町屋村・小山村・塩尻村・重古村、岩倉市：井上村・石仏村・神野村・八剣村・岩倉村・北島村・野寄村・曾野村・岩倉羽根村・大山寺村・川井村、小牧市：藤島村、北名古屋市：鍛冶ヶ一色村・徳重村・法成寺村・北野村・石橋村・弥勒寺村・西之保村・薬師寺村・鹿田村・熊之庄村

をなす宅地・寺社地・畑地などを微高地群として抽出し、その中を低地部との関係が認められるものを必要に応じて細分した。

(2) 地籍図による地形の分類

解析の結果、低地群を7群、微高地群を9群に分類した(図1)。以下にその結果を北西から南東へ順に述べる。

○低地群

低地群 A: 北小湊村の西側にみられる低地部で、新般若用水と関係しないものである。低地部 A ①と A ②(以下では、前述と同じ分類がくり返される場合は分類名を省略する)がある。

低地群 B: 浮野村・北小湊村・南小湊村にある低地群で、新般若用水周辺にある低地部 B ③を中心にそれにつながる低地部 B ①・B ②とその周囲にある水田を低地部 B ④～B ⑩で構成される。

低地群 C: 一色村の南端から佐野村、天摩村、南小湊村南東端にみられる低地部で、新般若用水と青木川に関係しないと思われるものである。低地部 C ①を中心に水田がつながっており、低地部 C ①～C ③に細分した。

低地群 D: 北東の小折村から南西の重吉村にのびる青木川に沿った水田の部分低地部 D ①とした。低地部 D ①と並行する天摩村南東部にある水田を低地部 D ②とした。

低地群 E: 小折村南部から加納馬場村・芝原村・石仏村西側・町屋村・小山村・塩尻村・重吉村東端部・北島村西側に分布する水田の部分で、青木川と幼川(現在の五条川)の間にあり、両河川に関係する低地群 D と F とつながっていないものである。低地部 E ①～E ⑫がある。

低地群 F: 地籍図にみられる幼川に関連すると思われる水田・草生などの部分で、現在の江南市南端部から北名古屋市の北部にいたる広い範囲に、49 箇所の低地部が分布する。幼川に隣接する水田の低地部は、低地部 F ①・F ②・F ③・F ⑤・F ⑦・F ⑨・F ⑪・F ⑬・F ⑮・F ⑯・F ⑰・F ⑱・F ⑲・F ⑳・F ㉑・F ㉒・F ㉓・F ㉔・F ㉕・F ㉖・F ㉗・F ㉘・F ㉙・F ㉚・F ㉛・F ㉜・F ㉝・F ㉞・F ㉟・F ㊱・F ㊲・F ㊳・F ㊴・F ㊵・F ㊶・F ㊷・F ㊸・F ㊹・F ㊺・F ㊻・F ㊼・F ㊽・F ㊾・F ㊿があり、地籍図の幼川と強い関係が想定される。

低地群 G: 地籍図にみられる矢戸川・巾下川に関係すると思われる低地部で、曾本村東部・八剣村東部・東市場村・藤島村・薬師寺村・熊之庄村・鹿田村南東部にひろがる。藤島村から

熊之庄村に分布する低地部 G ③～G ⑪はつながっており、一連の低地群である可能性がある。

○微高地群

北小湊微高地群: 北小湊村の低地部 B ①の西にある微高地群で、ひと続きになっている。この中で、北小湊東微高地は低地部 B ①の西に沿ってあり、低地部 B ⑨と B ⑩の東に南北にのびている。

浮野・北小湊微高地群: 低地部 B ③と B ①に挟まれた浮野村西側から低地部 B ①の東にある北小湊村東側にかけての部分で、4 箇所の微高地がみられる。この中で、新般若用水西微高地は低地部 B ③の西に沿ってあり、低地部 B ②の東に接してある。

浮野・南小湊微高地群: 低地部 B ③と C ①に挟まれた浮野村東側と一色村から佐野村西側と南小湊村にいたる部分で、2 箇所の微高地がある。但し、低地部 C ③と C ①に囲まれた微高地を除くとほとんどがひと続きの微高地である。この中で、新般若用水東微高地は低地部 B ③の東で B ⑤の西に沿ってある。またこの微高地の南西にのびる位置に南小湊西微高地があり、低地部 B ①の東で B ⑧の西に沿ってある。

穂積塚本・天摩微高地群: 低地部 C ①と D ①に挟まれた穂積塚本村と一色村から佐野村東側を経て天摩村と小山村西側に至る部分で、ひと続きの微高地群である。一色村では先に述べた浮野・南小湊微高地群と重複しており、この中で、青木が西岸微高地は低地部 D ①の西に沿ってある。

小折・重吉微高地群: 低地部 D ①と低地群 F に挟まれた小折村から加納馬場村・芝原村・石仏村・町屋村を経て小山村東側・塩尻村・重吉村に至る部分で、ひと続きの微高地群である。この中で、青木川東岸微高地は低地部 D ①の東に沿ってあり、南東側は低地部 E ②・E ③・E ⑥・F ⑧・E ⑪・E ⑫の北西端部に接してある。小折石仏微高地は低地部 F ①・F ②・F ⑤の西に沿ってあり、北西側は低地部 E ②・E ④～E ⑥・E ⑧・F ⑥の東端部に接してある。町屋塩尻微高地は低地部 E ⑪の南で西を低地部 E ⑫、東を低地部 F ⑥に挟まれている。

神野微高地群: 北側を低地部 F ②、東側を低地部 F ③、西側を低地部 F ⑤に囲まれたひ

と続きの微高地群で、神野村と岩倉村北端部の部分である。幼川に関連する微高地群である。

岩倉・西春微高地群：低地部 F ⑤と F ⑥の南で、低地部 F ⑨と F ⑯・F ⑰・F ⑳から西の微高地群で、岩倉村から川井村、北島村、鍛冶ヶ一色村・徳重村を経て、西之保村や石橋村に至る広い範囲に渡る。この微高地群には大小の低地部を多数含み、川井村と徳重村・鍛冶ヶ一色村の村境に幼川を挟むが、ひと続きのものとして抽出した。岩倉村東微高地は低地部 F ⑤・F ⑨・F ⑯・F ⑳の西に沿っており、西側は低地部 F ⑧～F ⑪・F ㉑、南側は低地部 F ㉒に接する範囲である。岩倉羽根川井微高地は幼川の北で低地部 F ㉓の西に沿っており、西側を低地部 F ⑨・F ⑯・F ㉓・F ㉔の東に接してある。徳重鹿田西微高地は岩倉羽根微高地の南に続く可能性があるが、幼川の南で、低地部 F ㉓と G ⑮の西に沿っており、西は低地部 F ㉓・F ㉔・F ㉕～F ㉗・F ㉘の東に接してある。

八剣・曾野微高地群：北側は幼川と重複する低地部 F ①～F ③の東で低地部 G ①の西、南側は低地部 F ⑨と F ㉓の東で低地部 G ②と G ⑨の西になる南北に長い微高地群で、北は曾本村・井上村から曾野村・薬師寺村を経て、鹿田村東側に至る部分である。岩倉村東側、薬師寺村と曾野村の村境に幼川を挟む。この中で、岩倉本町微高地は低地部 F ⑨・F ⑯・F ⑰・F ㉓・F ㉔の東に沿っており、北側は低地部 F ⑦付近から東側は低地部 G ②・F ㉔の西に接してのびる。八剣東市場微高地は西が低地部 F ①～F ③・F ⑤に沿っており、東側は低地部 G ①の東に接している、南側は低地部 F ⑦付近までで岩倉本町微高地と重なる。曾野大山寺微高地は岩倉本町微高地の南西側に続く微高地で、西側を低地部 F ㉓、東側を F ㉓・F ㉔に挟まれた範囲である。薬師寺鹿田東微高地は低地部 G ⑧の西に沿っており、西側は低地部 F ㉔・F ㉓・G ⑮の西に接する。

藤島・熊之庄微高地群：矢戸川と重複する低地部 G ⑧・G ⑨の東にある微高地群で、藤島村から熊之庄村にかけての部分である。この微高地群の中にある低地部は、矢戸川と重複する低地部 G ⑧や G ⑨と水田が続くものであり、形成された時期が同時である可能性もあり、そ

の形成が比較的新しい可能性がある。熊之庄西微高地は低地部 G ⑨の東に沿っており、東側を低地部 G ⑩・G ⑪に接している。

(3) 地籍図から見た地形の変遷

前節までに分類した低地部とそれに伴う微高地群は、地籍図にみられる河川と用水との位置関係からその形成順序について検討すると、古いものから新しいものへ大きく3段階の変遷が想定できる(表1)。

○古段階の地形

地籍図にみられる青木川と幼川、矢戸川、新般若用水に関係すると考えられる低地部とは直接関係のない低地部であり、より古い時期に形成されたものと考えられる。この基準によれば、北小淵微高地群の中にある低地部 A ①・A ②・B ⑨・B ⑩、浮野・南小淵微高地群の中にある低地部 B ④・B ⑤・B ⑥～B ⑧・C ③、浮野・南小淵微高地群と穂積塚本・天摩微高地群の境にある低地部 C ①、穂積塚本・天摩微高地群の中にある低地部 C ②・D ②、小折・重吉微高地群の中にある低地部 E ①～E ⑫、小折・重吉微高地群と岩倉・西春微高地群の境にある低地部 F ⑥、神野微高地群の中にある低地部 F ④、岩倉・西春微高地群の中にある低地部 E ⑬・F ⑧・F ⑩～F ⑮・F ⑰～F ㉓、F ㉔・F ㉕・F ㉖・F ㉗・F ㉘・F ㉙・F ㉚・F ㉛・F ㉜・F ㉝・F ㉞・F ㉟・F ㊱・F ㊲・F ㊳・F ㊴・F ㊵・F ㊶・F ㊷・F ㊸・F ㊹・F ㊺・F ㊻・F ㊼・F ㊽・F ㊾・F ㊿、八剣・曾野微高地群の中にある低地部 F ⑦・F ㉓・F ㉔・G ⑫～G ⑭がある。従って、これらの低地部と隣接する微高地も、より古い時期に形成されたものと考えられる。

○中段階の地形

低地部が青木川と幼川、矢戸川、新般若用水とは直接重複する位置にはないが、これらの河川や用水と重複する低地部と直接つながるものを、地籍図にみられる河川や用水の形成よりも古い時期に形成された低地部と考える。この基準によると、新般若用水と重複する位置にある低地部 B ③と B ①の南側につながる低地部は、低地部 B ①の北側と B ②がある。これらの低地部に浮野・北小淵微高地群が隣接する。幼川と重複する位置にある低地部 F ②・F ③につながる低地部には低地部 F ③と F ⑤と F ㉓、および F ㉓につながる F ⑨・F ⑯・F ⑰がある。神野微高地群と小折石仏微高地の南側、岩倉村

表 1 岩倉地域における地籍図からみた地形変遷

地形の変遷区分	古段階の地形	中段階の地形	新段階の地形
地籍図にみられる河川・用水との関係	重複する低地部ともつながらない低地部と隣接する微高地	重複していないが、重複する低地部とつながる低地部と隣接する微高地	重複してある低地部と隣接する微高地
新般若用水と関係するもの	北小淵微高地群：低地部 A①・低地部 A②・低地部 B⑨・低地部 B⑩ 浮野・南小淵微高地群：低地部 B④・低地部 B⑤・低地部 B⑥～低地部 B⑧・低地部 C③ 浮野・南小淵微高地群と穂積塚本・天摩微高地群の境：低地部 C①	低地部 B①北側・低地部 B② 浮野・北小淵微高地群	低地部 B③・低地部 B①南側 北小淵東微高地・新般若用水西微高地・新般若用水東微高地・南小淵西微高地
青木川と関係するもの	穂積塚本・天摩微高地群：低地部 C②・低地部 D② 小折・重吉微高地群：低地部 E①～低地部 E⑫		低地部 D① 青木川西岸微高地・青木川東岸微高地
幼川と関係するもの	小折・重吉微高地群と岩倉・西春微高地群の境：低地部 F⑥ 神野微高地群：低地部 F④ 岩倉・西春微高地群：低地部 E⑬・低地部 F⑧・低地部 F⑩～低地部 F⑮・低地部 F⑯～低地部 F⑲・低地部 F⑲・低地部 F⑳・低地部 F㉑・低地部 F㉒・低地部 F㉓～低地部 F㉔ 八剣・曾野微高地群：低地部 F⑦・低地部 F⑮・低地部 F⑲・低地部 G⑫～低地部 G⑭	低地部 F③と低地部 F⑤・低地部 F⑨・低地部 F⑯・低地部 F⑰ 神野微高地群・小折石仏微高地南側・岩倉町東微高地北側・岩倉羽根微高地・曾野大山寺微高地・薬師寺鹿田東微高地南側・徳重鹿田西微高地・岩倉町東微高地中央部・岩倉本町微高地・岩倉羽根微高地北側	低地部 F①・低地部 F②・低地部 F③・低地部 F④・低地部 F⑥・低地部 F⑨・低地部 F⑯・低地部 F⑰・低地部 F⑱・低地部 F㉑・低地部 F㉒・低地部 F㉓・低地部 F㉔ 小折石仏微高地・神野微高地群・八剣東市場微高地・岩倉本町微高地・薬師寺鹿田東微高地・徳重鹿田西微高地
矢戸川と関係するもの		低地部 G③～低地部 G⑦・低地部 G⑩・低地部 G⑪ 藤島・熊之庄微高地群	低地部 G①・低地部 G⑧・低地部 G⑨ 八剣東市場微高地・薬師寺鹿田東微高地・熊之庄微高地
発掘調査成果と関係するもの	低地部 E⑪・青木川東岸微高地・町屋塩尻微高地：町屋遺跡 低地部 F⑥・町屋塩尻微高地：猫島遺跡	低地部 F⑤：御山寺遺跡 NR	岩倉本町微高地：岩倉城跡

東微高地の北側から中央部、岩倉羽根微高地、曾野大山寺微高地、薬師寺鹿田東微高地の南側、徳重鹿田西微高地、岩倉本町微高地、岩倉羽根微高地の北側が隣接する。矢戸川と重複す

る位置にある低地部 G ⑧から南東に枝分かれて続く G ③～G ⑦・G ⑩・G ⑪があり、これらの低地部に藤島・熊之庄微高地群の 9 箇所微高地が隣接する。

○ 新段階の地形

[illegible]

古段階の地形に分類した低地部の中で、岩倉・西春微高地群の中にある低地部F⑮～F⑳・F㉓は、低地部F⑨とつながる可能性のある低地部で、その形成時期も中段階に近い可能性がある。また、八剣・曾野微高地群の中にある低地部F㉔とF㉖は、幼川や低地部F㉒とつながる部分があり、その形成時期は中段階に近い可能性がある。(蔭山)

3. 表層地形の分析

(1) 表層地形解析の分析方法

広域的な周辺地形を解析するため、1/2500スケールで等高線図を作成した(図2)。等高線図の作成にあたり愛知県一宮市、岩倉市、北名古屋市、小牧市、江南市、丹羽郡大口町の各市役所・役場発行の「都市計画図(1/2500)」にプロットされた標高値を基にした。なお、都市計画図は現況版に比べて人工的な土地の改変面積の少ない発行年の古いものを手に入れ、一宮市と岩倉市は1990年(平成2年)版、北名古屋市は1972年(昭和47年)版、小牧市は

1972 年（昭和 47 年）版、江南市は 1982 年（昭和 57 年）版、丹羽郡大口町は 1970 年（昭和 45 年）版を用いた。なお解析にあたって、河川堤防や高速道路、工場や学校のような、人工的に建設・造成されたことが明らかな標高値は除外して等高線を描画した。

(2) 分析結果

○遺跡周辺の等高線図

東西約 5.6 km、南北約 10.4 km の範囲全体では等高線間隔 0.2m（等高線間隔が密となり描画の難しいところは 1m 間隔）で標高 3.4m から標高 15m までの等高線が描かれる（図 3）。解析範囲全体では北で標高が相対的に高く、南に向かい低くなる傾向がある。解析範囲には一宮市、岩倉市、北名古屋市、小牧市、江南市、丹羽郡大口町が含まれる。解析範囲にみられる河川の現在の状況は、図の北西において新般若井筋（新般若用水）と青木川が北東から南西方向へ流れている。図の中央を五条川と矢戸川が北から南へ流れており、さらに矢戸川は北東方向から流下してくる巾下川と合流し、巾下川となって岩倉市曾野町付近において五条川と合流する。合流後は五条川となって南西方向へ流下するが、岩倉市大山寺町付近で北西方向へ大きく屈曲して西方向へ流路を変える。図の南には主要な河川はみられなくなるが、図の南西の北名古屋市法成寺付近では新たに水場川が南方向へ流下しはじめる。鉄道では図の中央部を、南北方向に名古屋鉄道犬山線が通る。道路では、図の中央部からやや北寄りを北東 - 南西方向に名神高速道路が通り、図の南西には南北方向に国道 22 号線と、その直上を名古屋高速道路 16 号が通る。図の北には国道 155 号線が東西方向に通り、図の中央を南北方向に主要地方道名古屋江南線が通っている。

解析図に描かれる等高線間隔の疎密の差により、解析図全体は図の中央付近にある標高 6m の等高線を境として地形の傾斜が相対的に急なところと緩やかなところとに分けられる。また、地形の傾斜が急な地域にはさらに等高線間隔が狭く傾斜が急になるところが認められ、解析図北端の一宮市千秋町穂積塚本付近や江南市小折本町付近では標高 11 ～ 15m とともに

標高値が高く、相対的に急傾斜の地域がみられる。いっぽう、標高 6m の等高線を境として相対的に低いところは、図の中央よりも南側の東西方向に広い範囲でみられ、南端の北名古屋市野崎や同市九之坪付近では標高 3.4m と、解析範囲においてもっとも標高値が小さくなる。解析図を概観してもわかるように、図の北側で地形の傾斜は相対的に急であり、南では緩やかであることが等高線間隔の疎密度により明瞭に表われている。解析範囲には上で述べたように標高 6m の等高線を境として地形の傾斜の緩急が分けられた。いっぽう、このような傾斜地形には等高線が環状に閉じる閉曲線で表される島状の地形と、島状の地形との間に挟まれて存在する谷地形も認められる。それらのさらに詳しい地形要素を北西から南東方向に列記する。

○相対的に標高が高く、尾根状や島状地形を呈するところ

周りに比べて相対的に標高が高く凸地形となり、尾根状や島状を呈するところがある。北西端から南東へ順に述べる。

1. 北西端の一宮市千秋町浮野（以下では同じ市町村域に含まれる場合には市町村名を省略する）には標高 10 ～ 11.8m に頂部が緩傾斜で南側に急傾斜面をもつ尾根状地形がある。

さらに東側の青木川の流路沿いに認められるもので、北から順に青木川右岸側では、

2. 千秋町穂積塚本の標高 11 ～ 13m で緩傾斜の頂部をもち、急傾斜地形で周りを囲まれた尾根状の地形。

3. 千秋町佐野から千秋町天摩にかけて標高 10 ～ 12m で緩傾斜の頂部をもち、北東 - 南西方向に長軸をもち長軸約 1010m、短軸約 340m の島状地形。

4. 千秋町浅野羽根の標高 9.0 ～ 9.8m で緩傾斜の頂部をもち、北東 - 南西方向に長軸のある長軸約 910m、短軸約 310m の島状地形。

5. 同じく千秋町浅野羽根の標高 8.0 ～ 8.6m で緩傾斜の頂部をもち、北東 - 南西方向に長軸のある長軸約 415m、短軸約 240m の島状地形。

青木川左岸側でも北から順に、

6. 千秋町加納馬場北の標高 12 ～ 14.6m で緩傾斜の頂部をもち、急傾斜地形で周りを囲まれた尾根状の地形。

7. 千秋町芝原の標高 12.0 ～ 12.6m で東西方向に長軸をもち長軸約 210m、短軸約 180m の島状地形。

8. 千秋町町屋の標高 10.6 ～ 11.2m で緩傾斜の頂部をもち、南北方向に長軸のある長軸約 670m、短軸約 360m の島状地形。

9.8 の南の千秋町町屋の標高 9.8 ～ 10.2m で緩傾斜の頂部をもち、南北方向に長軸のある長軸約 400m、短軸約 380m の島状地形。

10. 千秋町塩尻の標高 8.8m ～ 10.2m で東西方向の長軸約 240m、短軸約 210m の島状地形。

11. 丹陽町重吉の標高 9.0 ～ 9.2m で北東 - 南西方向に長軸をもち長軸約 340m、短軸約 190m の島状地形。

12. 同じく丹陽町重吉の標高 8.8 ～ 9.4m で東西方向に長軸をもち長軸約 230m、短軸約 190m の島状地形。

以上のように、青木川の流路沿いには右岸、左岸に合わせて合計 12 の尾根状・島状地形が認められる。

青木川の東で五条川との間に挟まれた地域には、現在そこを流れる河川の流路は見られえないものの島状地形が認められる。北から順に述べる。

13. 千秋町芝原には標高 12.0 ～ 12.6m で緩傾斜の頂部をもち、南北方向に長軸をもつ長軸約 300m、短軸約 270m の島状地形。

14. 岩倉市鈴井町から宮前町にかけての標高 10.8 ～ 11.2m で緩傾斜の頂部が 2 つみられ、南北方向に長軸約 600m、短軸約 300m の島状地形。

15. 北島町の標高 7.0 ～ 7.6m で南北方向に長軸をもち長軸約 550m、短軸約 290m の島状地形。

16. 一宮市三ツ井から丹陽町伝法寺の標高 6.0 ～ 6.8m で緩傾斜の頂部をもつ、北西 - 南東方向の長軸約 550m、短軸約 300m の島状地形。

以上のように、青木川の東で五条川とに挟まれる範囲には 4 つの島状地形が認められた。

五条川の流路沿いに認められるもので、右岸側では北から順に、

17. 江南市小折本町の標高 13 ～ 15.2m で緩傾斜の頂部をもち、周りを急斜面で囲まれた尾根状の地形。

18. 岩倉市石仏町の標高 11 ～ 12m で南北方向に長軸をもち長軸約 990m、短軸約 190m の島状地形。

19. 本町の標高 9.4 ～ 9.6m で長軸、短軸とも約 210m の島状地形。

20. 下本町の標高 8 ～ 9m で緩傾斜の頂部をもつ、南北方向の長軸約 490m、短軸約 280m の島状地形。

21. 同じく下本町の標高 9 ～ 10m で北東 - 南西方向に長軸をもち長軸約 130m、短軸約 90m で解析範囲ではもっとも矮小な島状地形。

22. 曾野町の標高 8.0 ～ 8.8m で平らな頂部をもち、南北方向の長軸約 340m、短軸約 230m の島状地形。

23. 稲荷町の標高 8.0 ～ 8.8m で平らな頂部をもち、南北方向の長軸約 370m、短軸約 340m の島状地形。

24. 大山寺元町の標高 7.2 ～ 9.2m で南北方向に長軸をもち長軸約 570m、短軸約 490m の島状地形。

25. 川井町の標高 5.8 ～ 7.2m で東西方向に長軸をもち長軸約 460m、短軸約 380m の島状地形。

26. 一宮市丹陽町伝法寺の標高 5.8 ～ 6.2m で南北方向に長軸をもち長軸約 460m、短軸約 360m の島状地形

以上のように五条川右岸には 10 の島状地形がみられる。左岸側では北から順に、

27. 江南市曾本町の標高 12 ～ 14m で北東 - 南西方向の尾根状地形。

28. 岩倉市八劔町の標高 11 ～ 11.4m で南北方向に長軸をもち長軸約 400m、短軸約 210m の島状地形。

29. 東町の標高 9.6 ～ 10.0m で南北方向に長軸をもち長軸約 230m、短軸約 180m の島状地形。

30. 大市場町の標高 8.0 ～ 8.8m で南北方向に長軸をもち長軸約 380m、短軸約 350m の、五条川と巾下川とに挟まれる島状地形。

31. 北名古屋市鍛冶ヶ一色の標高 6.0 ～ 7.0m で東西方向に長軸をもち長軸約 530m、短軸約 260m の島状地形。

32. 同じく鍛冶ヶ一色の標高 4.2 ～ 6.0m で南北方向に長軸をもち長軸約 230m、短軸約

180m の島状地形。

以上のように五条川左岸には 6 つの尾根状・島状地形がみられ、五条川の流路沿いには合計 16 の尾根状や島状地形が認められる。

いっぽう、標高 6m よりも低い南側の範囲は地形の傾斜が極めて緩く、現在そこを流れる河川流路はみられないものの、多くの島状地形が認められる。西から順に述べる。

33. 北名古屋市法成寺の標高 4.2 ～ 5.0m で南北方向に長軸をもち長軸約 480m、短軸約 330m の島状地形。

34. 石橋郷の標高 4.2 ～ 5.0m で南北方向に長軸をもち長軸約 420m、短軸約 390m の島状地形。

35. 野崎の標高 4.2 ～ 4.6m で東西方向に長軸をもち長軸約 340m、短軸約 250m の島状地形。

36. 西之保の標高 4.2 ～ 5.4m で東西方向に長軸をもち長軸約 420m、短軸約 370m の島状地形。

37. 御宮前の標高 4.2 ～ 7.0m で東西方向に長軸をもち長軸約 850m、短軸約 790m の、標高 7m の頂部を 3 つもつ島状地形。

38. 九之坪の標高 3.4 ～ 4.4m で南北方向に長軸をもち長軸約 560m、短軸約 510m の島状地形。

39. 鹿田の標高 4.6 ～ 6.4m で東西方向に長軸をもち長軸約 870m、短軸約 660m の、標高 6m を超える頂部を東西方向に 2 つもつ島状地形。

40. 鹿田黒門地の標高 4.6 ～ 5.4m で長軸約 380m、短軸約 360m の島状地形。

41. 東出の標高 5.0 ～ 6.0m で南北方向に長軸をもち長軸約 890m、短軸約 380m の島状地形。

42. 小島の標高 5.4 ～ 6.0m で南北方向に長軸をもち長軸約 580m、短軸約 450m の島状地形。

43. 道宅の標高 5.2 ～ 6.0m で南北方向に長軸をもち長軸約 260m、短軸約 160m の島状地形。

44. 天王森の標高 5.0 ～ 6.0m で東西方向に長軸をもち長軸約 380m、短軸約 180m の島状地形。

45. 一本橋の標高 5.4 ～ 6.0m で南北方向に長軸をもち長軸約 360m、短軸約 250m の島状地形。

46. 神明の標高 4.6 ～ 5.2m で南北方向に長軸をもち長軸約 420m、短軸約 300m の島状地形。

47. 久地野の標高 4.8 ～ 5.2m で長軸約 330m、短軸約 320m の島状地形。

以上のように、標高 6m よりも低い緩傾斜の範囲には 15 の島状地形が認められる。解析範囲には周りよりも標高が高く凸地形をなす 47 の尾根状や島状を呈する地形を認めることができる。

○相対的に標高が低く、谷地形を呈するところ

つぎに、等高線から読み取れる相対的に標高の低いところ、いわゆる谷地形について西から東へ順に述べる。

1. 図の北西端、新般若井筋（新般若用水）の西の一宮市北小淵には標高 7.8 ～ 11.0m に北東 - 南西方向の谷地形がみられる。

2. 現在の青木川の流路の西、一宮市穂積塚本と千秋町浮野から南小淵にかけての標高 7.8 ～ 12.0m に現われる北東 - 南西方向の谷地形。

3. 現在の青木川の流路に一致する一宮市穂積塚本から丹陽町重吉に至る標高 7.8 ～ 13.0m の北東 - 南西方向の谷地形。

4. 上記 3 の東で、江南市田折町から一宮市千秋町加納馬場、千秋町町屋、三ツ井までは北東 - 南西方向に、その後南へ屈曲し、九日市場を通り、北名古屋市山之腰五条に至る標高 4.8 ～ 13m の谷地形。

5. 上記 4 のさらに東側、岩倉市石仏町から岩倉市泉町、大地町、南新町、川井町に至る標高 4.2 ～ 11.0m の南北方向の谷地形。

6. 現在の五条川の流路に一致する江南市小折本町から岩倉市井上町、下本町、曾野町、大山寺町までは北から南へ流下し、大山寺付近で西へおよそ 90° 近く屈曲し北名古屋市鍛冶ヶ一色に至る標高 4.2 ～ 15.0m に至る谷地形。

7. 五条川の流路の東で、現在の矢戸川の流路に一致する大口町西之島、小牧市三ツ淵、藤島町、北名古屋市熊之庄、清水、鍛冶ヶ一色に至る標高 4.2 ～ 15.0m の谷地形。

8. 図の南西角、北名古屋市中之郷諏訪から中之郷西野に至る標高 4.0 ～ 5.0m の南北方向の谷地形。

9. 同じく図の南西角で、北名古屋市宇福寺東出から中之郷八反に至る標高 4.4 ～ 4.6m の南北方向の谷地形。

10. 図の東、江南市三淵から小牧市高島町梵

天、北名古屋市西出、坂巻まで北東 - 南西方向に流下し、坂巻付近で分岐し、現在の五条川の流路方向に並行して鍛冶ヶ一色、法世寺師堂に至る谷地形と、清水、野崎方向の南方向へ向かう標高 3.4 ～ 15m で全体には北東 - 南西方向の谷地形。

上記のほかにもいくつかの小さな谷地形が認められるものの、解析範囲には大きく 10 の谷地形が認められる。

表層地形解析の結果をまとめると、解析範囲には標高 3.4m から標高 15m までの等高線が描かれ、標高 6m の等高線を境として、地形の傾斜が相対的に急な北側と緩やかな南側とに分けられた。標高 6m よりも高い範囲には周りよりも相対的に高い 32 の尾根状ないし島状地形が認められた。また、標高 6m よりも低い範囲には 15 の島状地形が認められ、解析範囲全体では合計 47 の尾根状・島状地形がみられる。いっぽう、解析範囲全体には大きく 10 の谷地形が認められる。

（４）尾根状・島状地形と谷地形との対応関係

表層地形解析では東西約 5.6 km、南北約 10.4 km の解析範囲には周りよりも標高が高い尾根状ないし島状の地形が 47 認められた。いっぽう、相対的に標高の低い 10 の谷地形もみられた。それらの起伏が現在の地形とどのように対応するのか検討を加える。

解析範囲の北西にある青木川について、ちょうど一宮市穂積塚本から丹陽町重吉までは等高線間隔が狭く、右岸と左岸の両岸を固定され側方を規制された流路であることがわかる。青木川の流路沿いには明瞭な尾根状・島状の地形が認められ、右岸に 4、左岸に 7 の合計 11 の島状地形に囲まれている。これらは現在の青木川の流路方向と調和的であり、青木川に伴う自然堤防である。解析範囲の中央を流れる五条川についても青木川と同じように明瞭な島状地形が流路沿いにみられ、右岸で 10、左岸で 6 の合計 16 の島状地形が認められた。これらも現在の五条川の流路方向と調和的であり、五条川に伴う自然堤防であると言える。青木川と五条川の流路を比較すると、青木川の流路がその両岸に自然堤防を良好に発達させているのに対し

て、五条川では流路の右岸（西側）の自然堤防の発達が顕著であるという特徴を指摘できる。また、下流側では島状地形が少なくなる。

いっぽう、現在そこを流下する河川がみられないにも関わらず、周囲よりも標高が高く島状の地形が認められる地域がある。例えば、青木川と五条川とに挟まれた地域には、北の一宮市千秋町芝原から岩倉市鈴井町、北島町、一宮市三ツ井にかけての北東 - 南西方向に閉曲線で囲まれた島状の地形が散発的にみられた。これらの地形について、島状地形と島状地形の間には等高線が標高の高い方へ向かい上に凸となる等高線が描かれ、これは谷地形を示す。解析範囲には大きく 10 の谷地形が認められた。

（５）地籍図解析と表層地形解析との対応関係

地籍図の宅地・寺社・畑地の分布パターンから微高地群が、水田・草生のパターンからは低地群が区分され、9つの微高地群と7つの低地群が分類された。いっぽう、表層地形解析からは周りよりも標高の高い47の尾根状ないし島状の地形と10の谷地形が認められた。ここでは地籍図解析と表層地形解析のそれぞれの分析結果の対応関係について、解析範囲の北西端から南東へ順に検討する。

北西端では北小淵微高地群と浮野・南小淵微高地群の2つの微高地群と低地群A・B・Cの3つの低地部に分けられた。これらは表層地形解析の尾根状地形1と谷地形1・2に対応する。そこから東の穂積塚本・天摩微高地群は青木川の流路の右岸に認められた尾根状・島状地形2～5に、低地群Dは谷地形3に対応する。さらに東の小折・重吉微高地群は青木川の左岸にみられる尾根状・島状地形6～12に、低地群E・Fは谷地形4に対応する。神野微高地群と八剣・曾野微高地群は五条川の流路沿いにみられる尾根状・島状地形17～32に、低地群Fは谷地形の5～10に対応している。岩倉・西春微高地群は標高6mよりも低い範囲にみられた島状地形33～47に、低地群Gは谷地形10に対応する。全体の対応関係をみると、標高6mよりも高い範囲では地籍図解析と表層地形解析の結果とはよく対応しており、尾根状や島状地形の認められるところには宅地や畑地の密度が高

く、谷地形がみられるところには水田や草生が多かった。標高6mよりも低い範囲においても基本的によく対応しているが、例外的に地籍図解析南端の石橋村にある低地部F⑭は、相対的に標高が高い島状地形34の東側を南北にのびており、あまり対応していない。一部に例外がみられるものの、解析範囲全体では地籍図解析と表層地形解析との結果とはよく対応している。（鬼頭）

4. 岩倉地域における旧河道の変遷

これまでに述べた地形について、その形成時期を検討するために岩倉地域周辺の遺跡における発掘調査、及び地質調査で確認された成果をもとにする。

（１）現在の河川流路と地形との対応関係について

地籍図解析の結果と表層地形解析との結果には概ねよい対応関係がみられ、地籍図の微高地群がみられる場所には尾根状・島状地形が、地籍図の低地部には谷地形が存在した。特に標高6mよりも高い現在の青木川や五条川でこの対応関係は良好であり、流路内には低地部が、流路沿いには微高地群がみられ、尾根状・島状地形と谷地形もそれに対応した。いっぽうで、現在では河川の流路がみられないにも関わらず、地籍図解析の微高地群と低地部が表層地形解析の尾根状・島状地形と谷地形とに良好に調和している地域がみられ、そのような場所にはかつての谷地形が推定される。例えば、地籍図解析において小折重吉微高地群と低地部E②～E⑫・F⑥として分類されるところには、表層地形解析では北の江南市田折町から南へ一宮市千秋町加納馬場、千秋町町屋、三ツ井を経て九日市場、北名古屋市山之腰五条に至る標高4.8～13mの谷地形が読み取れる。現在この地域には青木川や五条川に匹敵するような川幅をもつ河川はない。だが、小規模な用水路が北東から南西方向に流下しており、その名残であると思われる。この谷地形の一端を発掘調査したものに一宮市千秋町町屋にある町屋遺跡と一宮市千秋町塩尻にある猫島遺跡、一宮市丹陽町三ツ井にある三ツ井遺跡がある。これらのうち、町

屋遺跡は低地部 E ⑪を挟んで青木川東岸微高地と町屋塩尻微高地にまたがって立地しており、低地部 E ⑪の南北で弥生時代中期前葉～弥生時代後期の竪穴建物、方形周溝墓が、遺跡の北側では自然流路が確認されている。この自然流路はその南において弥生時代中期中葉後半の双口壺・高杯が砂層に覆われており、この自然流路は低地部 E ⑪の付近から北から順に流路が変遷して、弥生時代中期中葉後半から古墳時代前期までに埋没したものとされる（旧河道 B）。低地部 F ⑪付近に自然流路が流れていた時期は弥生時代中期前葉より古く、弥生時代中期中葉までには自然流路が埋没した上に集落が営まれたものと考えられる。猫島遺跡は町屋塩尻微高地の南東縁辺部から低地部 F ⑥にかかる位置にあり、弥生時代中期前半の環濠集落の北東にある 99F 区・00B 区において弥生時代中期中葉前半の方形周溝墓の下に、縄文時代晩期頃の土器小片が出土する自然流路 NR01 が確認されている（旧河道 C）。自然流路は町屋塩尻微高地にかかる北東から、低地部 F ⑥の南西に流れている。低地部 F ⑥にかかる 99D 区では、自然流路が埋没した上に、弥生時代中期の土器を包含する地層が堆積しており、弥生土器包含層上面から中世の方形土坑が確認されている。この低地部 F ⑥に自然流路が流れていた時期は弥生時代中期以前で、中世には湿地化した状態であったことが想定できる。さらに南西に位置する一宮市丹陽町の三ツ井遺跡は低地部 E ⑫と F ⑥とが合流した南西に位置し、発掘調査では縄文時代から室町時代までの井戸・土坑・溝などの遺構が確認された（田中編 1999）。この遺跡の地下において考古遺物が出土しなくなる地層、いわゆる基盤層は粗粒砂層とシルト層との互層からなり、東方向に数～10°程度の傾斜をもって交互に繰り返す堆積構造が観察された。この構造は地質学的にはイプシロン型斜交層理とよばれ、河川の蛇行により横方向（側方）に砂州（突州）を成長させていった証拠である（Allen 1963）。イプシロン型斜交層理をもつ互層はその直上を黒褐色を呈する粘土層により覆われた。黒褐色粘土層の放射性炭素年代測定が実施されており、砂層直上を覆う標高 6.38m の黒褐色粘土層で 2900

± 60 yrs BP (Gak-20057) を、同様に砂層を覆う標高 7.43m の黒褐色粘土層で 2540±90 yrs BP (Gak-20043) の数値年代を示した（鬼頭 1999）。このことから、約 2900 年よりも前には三ツ井地点にはイプシロン型斜交層理をつくるような河川流路が存在したことになり、表層地形解析で得られた北東-南西方向の谷地形は約 2900 年前以降から水理エネルギーが小さくなっていったことがわかる。

これと似た例が三ツ井遺跡のさらに東でもみられる。地籍図解析の神野微高地群と低地群 F との組み合わせがそれであり、表層地形解析において五条川右岸に認められた島状地形（17～26）と岩倉市石仏町から岩倉市泉町、大地町、南新町、川井町に至る標高 4.2～11.0m の南北方向の谷地形との組み合わせが調和的である。この谷地形に関して、解析範囲中央付近にある岩倉市中野町・鈴井町において御山寺遺跡の発掘調査が行なわれた（石黒編 2011）。御山寺遺跡は低地部 F ⑤の東西にかけて発掘調査が実施されており、西にあたる調査区では古代から中世に流れていた自然流路が、東では戦国時代の自然流路が確認された（旧河道 E）。この自然流路の上位には江戸時代以後の水田遺構が形成されていた。この調査では今回と同じく表層地形解析も行なっており、やはり北の岩倉市石仏町から神野町、本町、泉町を通り下本町に至る谷地形の存在を指摘している（鬼頭 2011）。また、三ツ井遺跡と同様に層序の観察と放射性炭素年代測定を実施し、下位の礫層を覆う標高 9.76～10.12m の黒褐色粘土層の粘土ブロック混在層の標高 9.78m の土壌が 3209-3141 cal yrs BP (PLD-16171)、標高 7.64～8.54m の紫灰色～暗灰色粘土層の標高 8.26m の土壌が 3079-2998 cal yrs BP (PLD-8032) と約 3000 年前代を示す数値年代が得られた（鬼頭 2011）。三ツ井地点と同じように表層地形解析により谷地形が認められ、谷の埋積が約 3000 年前代には始まっていたことがわかる。以上のように、現在の青木川や五条川に匹敵するような河川流路がみられない場所にも、かつてそこを流れていたと思われる放棄河道が谷地形として残っており、約 3000 年前を境として主要な活動的流路から埋積谷堆積

物への変遷が捉えられる場所があり、それらは地籍図解析と表層地形解析でも捉えられるスケールの痕跡を残している。

(2) かつての五条川の流路はどこか

現在主要な河川がみられないところにもかつて河川流路があったことを、地籍図解析と表層地形解析の結果から指摘した。ここでは解析範囲の中央を流れる五条川について検討を加える。現在の五条川の流路沿いには地籍図解析においては八剣・曽野微高地群と低地群F・Gの組み合わせがみられ、表層地形解析でも現在の五条川の流路と同じ場所に江南市小折本町から岩倉市井上町、下本町、曽野町、大山寺町、北名古屋市鍛冶ヶ一色に至る標高4.2～15.0mの谷地形が認められた。地籍図解析と表層地形解析との対応関係をみると、現在の五条川の流路に関して、両解析の結果は良好に対応する。ところが、現在の五条川の流路以外にも河道であった可能性を指摘できる5つの谷地形が認められる。そのひとつとして、岩倉市石仏町から泉町、大地町、南新町、川井町に至る標高4.2～11.0mの谷地形がある。さらにこの谷には、東の現在の五条川の流路方向から合流する様な谷もみられ、岩倉市本町付近から南西の新柳町へ向かう小さな谷地形や、岩倉城跡の北と南を経て下本町、大地町、川井町を経てさらに北名古屋市鍛冶ヶ一色町までにみられる標高4.2～7.8mの谷地形もある。いっぽう、現在の五条川流路の東にも同様な谷が見出され、岩倉市中本町から南西の栄町に向かう小さい谷地形や、下本町、東新町を経て現在の矢戸川への通じる谷地形がある。これらの谷地形の形成年代に関する地質情報をわれわれはもっていないが、それらは岩倉市石仏町から泉町、大地町、南新町、川井町に至る標高4.2～11.0mの南北方向の谷地形の一部ともいえ、岩倉市中野町・鈴井町の御山寺遺跡において約3000年前を境として主要な活動的流路から埋積谷堆積物への変遷が推定されたことから考えると(鬼頭2011)、これらの谷地形も約3000年前ごろにはすでに形成されていた可能性がある。実際にこの谷地形に沿ってその西には弥生時代中期の大地式土器で著名な大地遺跡、縄文時代中期末葉のノンベ

遺跡、東には弥生時代～室町時代の御土井廃寺跡と縄文時代～室町時代の国衙遺跡、弥生時代～平安時代の曽野遺跡などが知られており(図3)、形成年代は古そうである。また、すでに述べたが、五条川西の御山寺遺跡の発掘調査においても岩倉市中野町に位置する05Eb区東から06Cb区西にかけて、弥生時代後期末の方形周溝墓よりも古い自然流路NR2002が確認されている。NR2002は2段階の堆積があり、全体の幅は40m前後である。五条川の東岸にある岩倉城遺跡の89D区～89F区・90A区においても古墳時代前期初頭の方形周溝墓SZ1201より古い東西幅約80m以上の自然流路と考えられる粗砂と、古墳時代中期～後期の方墳SZ1301～SZ1303より新しく戦国時代の溝SD10などよりも古い東西幅約80mの自然流路と思われる粗砂の堆積が確認されていて、その東の90B区では縄文時代晩期の竪穴建物がみつまっている。これらの縄文時代から古代にかけて現在の微高地上を流れていた自然流路を復元するのは難しいが(これらの自然流路を旧河道Dとする)、五条川付近の地形の形成が古いことを示す資料といえる。現在の五条川の流路は、本町付近を北から南へ直線的に流下しているが、ここで述べた谷地形や自然流路跡はかつて本町から下本町付近を境にして西と東へ分岐し流下していた痕跡と考えたい。

ところで、現在の五条川の流路は、解析範囲において北から江南市小折本町を通り岩倉市井上町、下本町、曽野町、大山寺町付近に至るまでほぼ直線的に北から南へ流下している。ところが、大山寺町―徳重付近になると西へ大きく屈曲し、流路は軽微な蛇行を繰り返しながら河川流路全体では北に凸の形を保ちながら北名古屋市鍛冶ヶ一色に至っている。解析範囲には北西から南東へ向かい順に、新般若井筋(新般若用水)、青木川、五条川、矢戸川、巾下川が北東から南西方向へほぼ直線的に流下する傾向を示している。ところが、五条川の流路だけが大山寺町―徳重付近で西へ大きく屈曲するのである。ここで表層地形解析図に描かれる等高線図と現在の五条川の流路との対応を見てみると、大山寺町―徳重付近はちょうど標高6m付近を境にして地形の傾斜が変わる傾斜変換点にあた

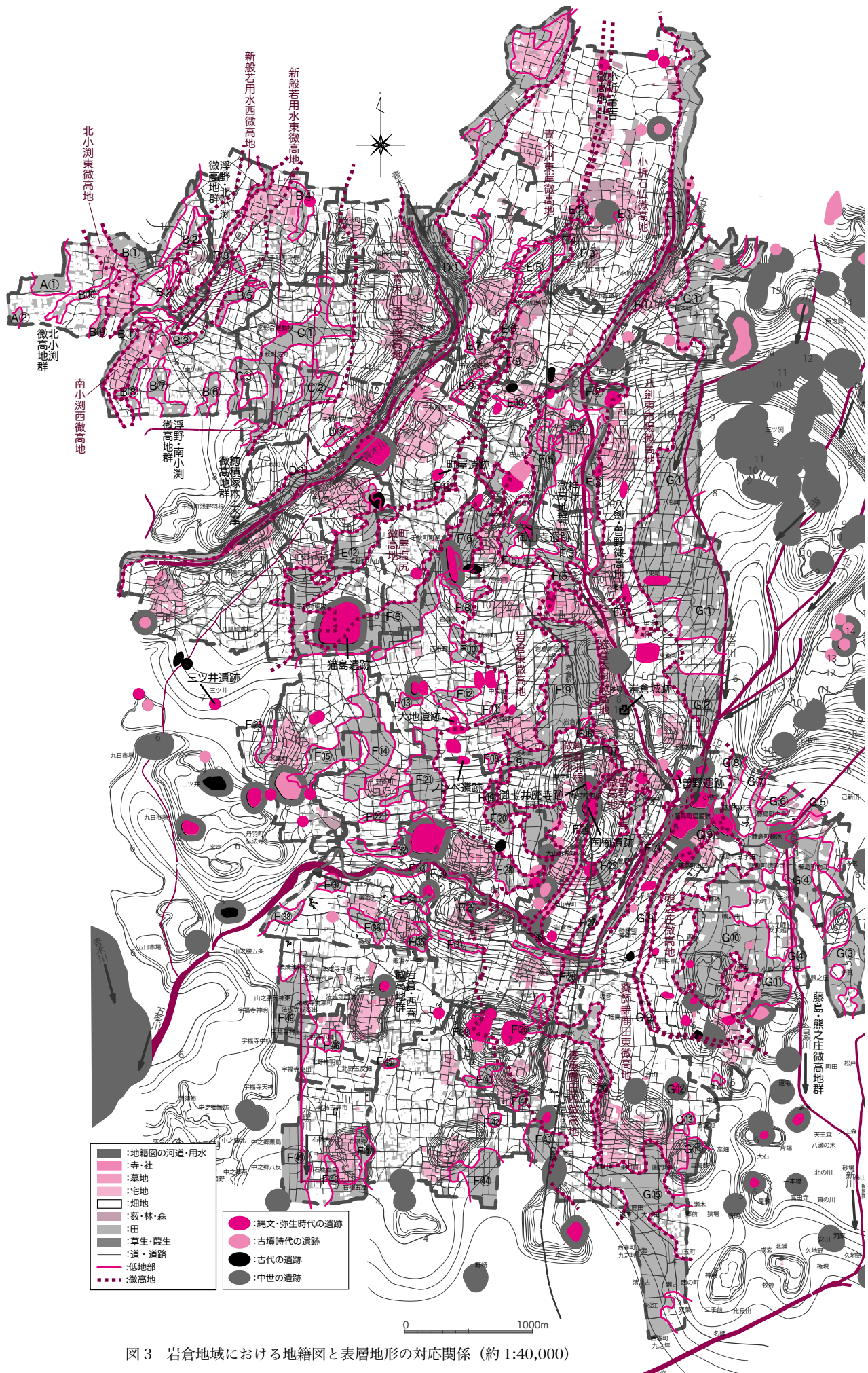


図3 岩倉地域における地籍図と表層地形の対応関係 (約 1:40,000)

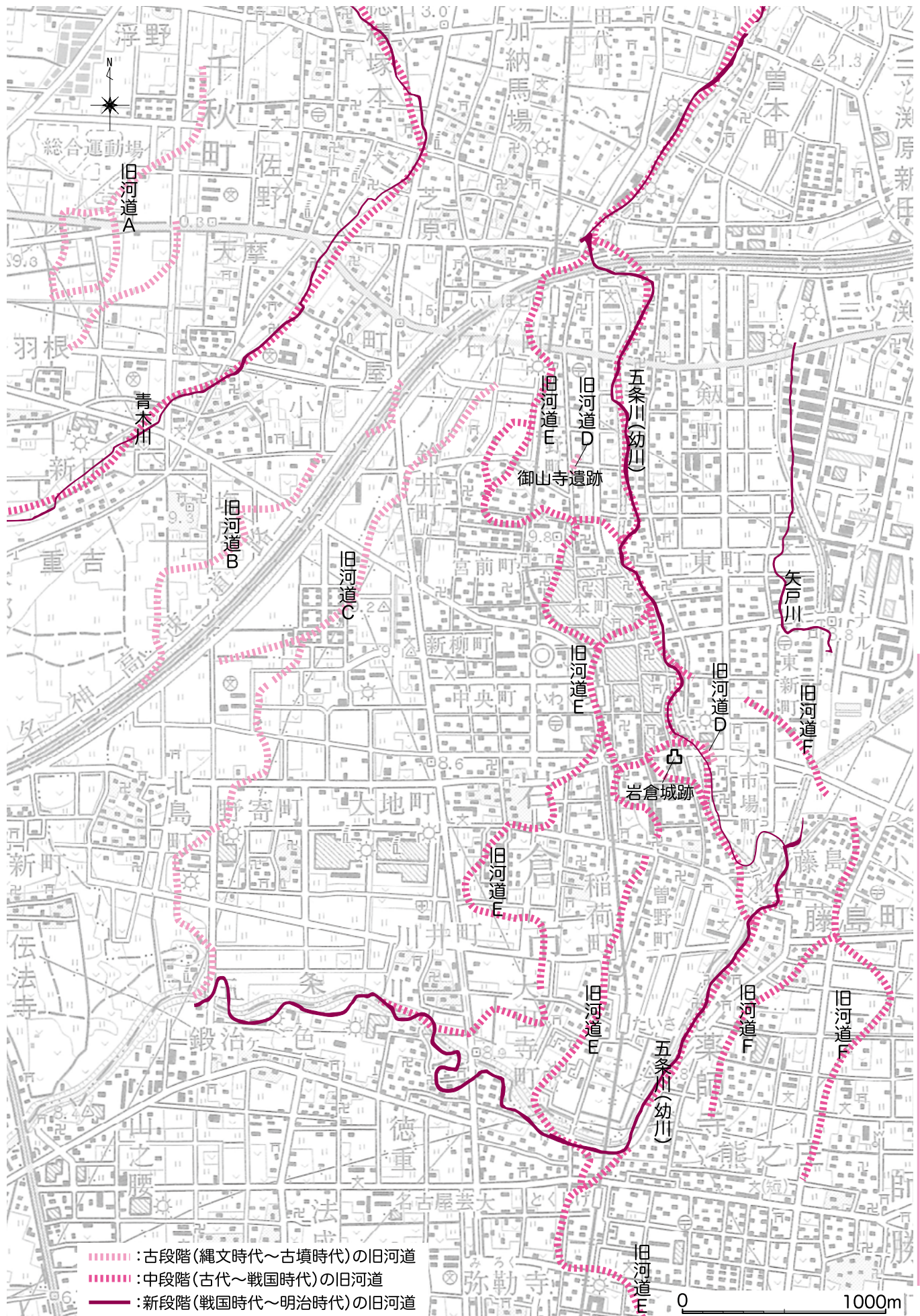


図4 岩倉地域における旧河道の復元想定図 (1:25,000)

っている。標高 6m よりも低い地域は大山寺町よりも南の北名古屋市御宮前、坂巻、廻間、清水などにみられる。つまり、現在の五条川の堤防がなかったと仮定すれば、五条川の流路を流れる水は、屈曲などを経験することなく大山寺町—徳重付近をそのまま南へ流れ下るだろう。ところが、実際の五条川は大山寺町—徳重付近で南へは流れずに西へ大きく曲がる。加えて、屈曲後の流路はさらに標高の高い方を目指し、北名古屋市鍛冶ヶ一色の標高 6.0～7.0m の島状地形と川井町の標高 5.8～7.2m の島状地形とのあいだ、水平距離にして北西-南東距離約 1200m の区間を貫流し、それ以降は標高 5m 前後の等高線に沿って流れている。この流路の状況は物理学的・地質学的に考えて極めて不自然であると言わざるを得ない。このように表層地形解析の結果と実際の河川流路の方向とが調和的でない場合がある。例えば、解析範囲の五条川下流端のさらに西約 430m は五条川と青木川との合流地点となるが、ここでの表層地形解析からは青木川の現在の流路が本来流れるであろうと予想される方向には流れておらず、現在の流路が人工的な瀬替えの可能性があることを指摘した(鬼頭 2009・2013)。五条川においても大山寺町—徳重付近で予想される方向には流れておらず、瀬替えなどの人工的な改変の可能性が指摘できる。加えて、屈曲部よりもさらに北にある岩倉市本町から下本町にかけての解析範囲では矮小な島状地形が認められた場所から、そこより南東の曾野町の五条川と矢戸川との合流地点までの区間について、先にも述べたように、その島状地形を境にして西と東に 5 つの谷地形が現れた(図 3・図 4)。北から流れてきた五条川の水は西か東、ないしはその両方向へ流下するのが物理学的に自然である。ところが、実際の五条川は標高の低い方へは流れず、左岸の大市場町でみられた標高 8.0～8.8m で五条川と巾下川とに挟まれた島状地形と、右岸の曾野町にある標高 8.0～8.8m の島状地形との間、水平距離にして北西-南東距離約 830m の区間を貫流している。ここでも物理学的には不自然に、敢えて標高の高いところを流れているのである。ここで述べた五条川、大山寺町—徳重付近での屈曲に関して、伊

藤(1994a・1994b・2010)は流路の屈曲の不自然さについて述べているが、地籍図および表層地形解析の結果も極めて不自然であることを指摘でき、その原因は人工的な瀬替えであると考えられる。(鬼頭・蔭山)

(3) 岩倉地域の旧河道の復元

以上の分析より現在の表層地形にみられる谷地形と地籍図にある地形の低地部が対応するものを旧河道の痕跡として考え、岩倉地域の旧河道を復元したものが図 4 である。河道は A から F まで 6 つに分けられ、周辺に立地する遺跡や発掘調査の結果を考慮して古段階・中段階・新段階の 3 時期に分類した。

○古段階の旧河道

縄文時代から古墳時代にかけての旧河道を想定する。古段階の低地部は大小の規模のものが多数みられる。これらは、古い時代の網状河川の名残りと考えられる。ここでは、現在の表層地形の谷地形と対応する主要なものを岩倉地域の北西側から順にあげる。

旧河道 A：一宮市千秋町一色と千秋町浮野の境界付近から千秋町佐野中央部にいたる北東から南西にのびる谷地形に対応する低地部 C ①～C ③がある。この中では微高地と低地部の位置関係から、低地部 C ①が最も新しい旧河道の痕跡と思われる。

旧河道 B：一宮市千秋町小山と千秋町町屋の境界付近から千秋町塩尻の西南端部におよぶ谷地形で低地部 E ⑫に対応する。低地部 E ⑫の東側にある低地部 E ⑪と続く可能性があるものである。町屋遺跡の弥生時代中期に埋没する旧河道と関係する。

旧河道 C：岩倉市石仏町西側と一宮市千秋町町屋東側付近から千秋町町屋の南端部を経て千秋塩尻町南西部にいたる谷地形で、低地部 F ⑥に対応する。低地部 F ⑥の南にある低地部 F ⑭・F ⑮に続く可能性があるものである。猫島遺跡の弥生時代中期中要前半以前に埋没する旧河道に関係する。

旧河道 D：岩倉市神野町から下本町にかけて、御山寺遺跡や岩倉城遺跡の発掘調査においてみつかっている古墳時代以前の自然流路である。旧河道全体の変遷はほとんどわかっていない。

○ 中段階の旧河道

古代から戦国時代にかけての旧河道を想定する。主に2つある。

旧河道 E：岩倉市石仏町の北東隅部にある五条川に沿った谷地形から南西に分岐し、中野町と鈴井町の境界付近を南下し、本町の北西側と栄町を経て昭和町北側で南西側の川井町へむかう谷地形と南東側の岩倉羽根町と曾野町や大山寺町を経て北名古屋市徳重町の東端部や北名古屋市鹿田町の西側に至る谷地形がある。この谷地形に対応するものは低地部 F ②・F ③・F ⑤・F ⑨・F ⑯・F ⑰・F ⑳・G ⑮に続くものである。

旧河道 F：現在の矢戸川に関連する谷地形とも関係するが、地籍図にみられる矢戸川の流路とはあまり対応していない。しかし現在の五条川付近にある岩倉市下本町東端部付近から大市場町西側を経て曾野町東側にみられる谷地形と低地部 G ②に対応するものである。南東の下流は小牧市藤島町、北名古屋市熊之庄町西側から薬師寺町と熊之庄町の境界付近にあたる地籍図中の低地部 G ⑧・G ⑨と北名古屋市熊之庄町中央部にあたる低地部 G ⑩に続く可能性がある。

○ 新段階の旧河道

現在の青木川と地籍図では幼川と表される現在の五条川がある。これらの河道は地籍図にみられる河道から現在の河道に河川改修がなされているが、その流路は戦国時代以前にさかのぼる可能性が高い。五条川の流路については、先に述べたような多様な変遷が想定されるが、古墳時代前期以前に流れていた旧河道 D の流路跡などに規制、あるいはその跡が利用されて現在に至るものと考えられる*。(蔭山)

5. 岩倉城下の再検討

(1) これまでの岩倉城下町の復元案

本節では、上述の岩倉地域の河川変遷の検討結果を受け、岩倉城のあり方を再検討する。

岩倉城は文明 11 (1479) 年に守護代織田敏広により築城され、永禄 2 (1559) 年に織田

* 岩倉城遺跡の発掘調査地点において、五条川が流れている東西幅 100m 程の凹地部分（標高 7.8m の戦国時代の溝検出面）などが自然流路の痕跡である可能性がある。

信長に攻められ廃城となった。江戸時代の地誌類（『張州府志』『尾張志』など）に、岩倉城の構造は「東西五十間、南北九十四間」で二重堀を持っていたと記述されるが、具体的な形状を把握することは難しかった。しかし、昭和 63 年から始まった発掘調査により、ようやく現五条川右岸の岩倉市下本町に二重堀を持つ主郭が存在することが確定的となった（松原 1992）。また、対岸にも堀で囲まれた区画が確認されており、これらの調査成果を受け、金子健一等が地籍図による解析を含めて岩倉城下町の復元的研究を行った（金子 1990、金子・鈴木 2006）。

岩倉城主郭（居館）の堀は東辺と西辺で確認され、東側外堀は幅約 12m で深さ約 3.5m、東側内堀は幅約 20m で深さ約 7m、西側外堀は幅約 10m で深さ約 2m、西側内堀は幅約 23m で深さ約 3m 以上の規模を持つ箱堀であることが確認された。これらの堀は現五条川とは全く接合することなく展開したと推定される。また、左岸にも堀で囲まれた区画があり、その東西両側の堀は幅 8～9m で深さ約 2.5m を測る。規模は右岸と比べ劣るものの現五条川とは全く独立して存在すると考えられる。

一方、岩倉城下町の構造の復元については、発掘調査は全く行われておらず、地名や地籍図などから推定することしか方法はない。居館南部「丸ノ内」では半町四方の武家屋敷を想定し得る地割があり、さらにその南側に「居屋敷」の地名が残るという。また、五条川右岸の「真光寺」と「天神塚」でもブロック状地割が分布しており、その南で前述した堀も検出されている。これらの地区では、方形の武家屋敷が展開したと推定され、「丸ノ内」では神明生田神社、「真光寺」では心光寺などの寺社も一部存在したと考えられる。一方、県明神社周辺には大門寺があったと伝えられ、その近辺に「大市場」の地名が残っている。北部には下市場の地名が残っており、これらの武家屋敷域の外縁部に商工業地が展開した可能性が考えられる。この商工業地は現五条川に近接した位置にもなっている。さらに、岩倉城下町西部と北部には寺院が散見される。

このようにみると、岩倉城主郭は五条川を強く意識した遺構配置となり、岩倉城下町の空間

構成も五条川を境に大きく異なっていることから、五条川が存在が前提で岩倉城は展開したといえる。現五条川は岩倉城付近では築城当初からほぼそのまま存在したと推定できる。

(2) 岩倉城主郭をめぐる2本の旧河川

さて、これまで地籍図解析と地表面解析の結果から、岩倉城周辺では主郭の東約200mの位置に南流する古段階の旧河道Dと、主郭の西約200mの位置に南流する中段階の旧河道Eと、新段階の五条川の3本の旧河川が推定された。旧河道Dは室町時代には埋積していることが岩倉城遺跡の発掘調査で明らかになっている。

一方、旧河道Eは岩倉市石仏町北東部で五条川から分岐し、そこから部分的に流路が複数想定され様相は複雑である。中野町付近で分岐・合流する地点(旧河道E1)、本町で分岐し五条川と交差する地点(旧河道E2)、中本町で五条川から分岐し合流する地点(旧河道E3)、下本町から西へ分岐し大地町へ流下する地点(旧河道E4)、下本町で五条川から分岐し合流する地点(旧河道E5)、旧河道E5から分岐し稲荷町付近で合流する地点(旧河道E6：前節までは規模が小さいため低地部と表記していない)などが確認される。旧河道E本流部は御山寺遺跡で戦国時代に存在したことから、河川全体も中世を通じて存在したものと推測される。しかし、旧河道E5と旧河道E6は岩倉城主郭の外堀と内堀に重複しているため戦国時代には埋没していたと考えられ、分岐・合流する支流の多くは戦国時代には流れていなかったものと推定される。

新段階の現五条川については、戦国時代では微妙に流路が変わっている可能性が高い。岩倉城主郭の北東側の部分について、五条川を避けて岩倉城主郭を復元すると、その部分のみ平面形が歪にならざるを得ない。しかし、前節までは規模が小さいため低地部と表記していない旧河川跡を地籍図から読み取ると、図5のように五条川を復元できる。これを採用すれば、整った岩倉城主郭の平面形が想定でき、尾張守護所に相応しいものとなる。ここでは戦国時代では流路を微修正した形であったと考えておく。

以上の分析により、戦国時代に存在したのは

旧河道E本流と五条川の2本といえる。具体的には、五条川は岩倉市石仏町から旧河道Eが分岐して約4kmの間は概ね平行して南流し、岩倉市大山寺町で合流または交差する、と整理される。岩倉城主郭の位置は両河道の間に位置しており、中洲状の微高地に立地したとみることができる。

これを岩倉城遺跡の東西方向の土層断面模式図で検討してみると、西半部は現五条川部の地表面が標高9.0m、主郭中央部が標高10.0m、主郭西端部が標高8.5mを測り、東半部は現五条川部の地表面が標高8.5m、主郭中央部が標高9.5m、主郭西端部が標高9.0mを測る。この状態は地表面のみならず戦国時代の遺構面においても同様であり、先の旧河道の推定と矛盾するものではない。

この結果、主郭は中洲状微高地、東側の区画は五条川の自然堤防による微高地を生かした立地であることと、主郭の東西両側の堀の位置は旧河道E5と旧河道E6の河川跡地と五条川の河川敷に相当しており、低い地形を活用して構築されたことが分かる。地形をうまく利用した居館であったといえる。

五条川の流路は、地籍図解析では岩倉市中央町地点と岩倉市下本町地点で東西に分岐する旧河道が想定された。また表層地形解析では岩倉市本町より南側で西と東に2つの谷地形がみられ、かつては東西に分岐して流れたことが推定された。この岩倉市本町南で確認される東西2本の旧河道について岩倉城下町の遺構配置と対照してみる。まず、西に流下する旧河道部は、岩倉城主郭北側を画する堀の位置に相当しており、中世以前での河川の存在を否定する理由はないが、戦国時代には埋没していたと言わざるを得ない。一方、東に流れる旧河道については不明瞭ながら武家屋敷や大円寺および大市場などが展開しており、にわかにはその存在は認めがたい。東の旧河道(＝旧河道D)は岩倉域よりかなり以前に埋没したものと理解したい。

さて、現在、岩倉市本町南で五条川は南流し、これまでの岩倉城下町の復元研究から戦国時代まで遡ることが推定された。しかし、上述のように東西に分岐する旧河道を目の前にして、五条川が直線的に南流することは不自然なことで

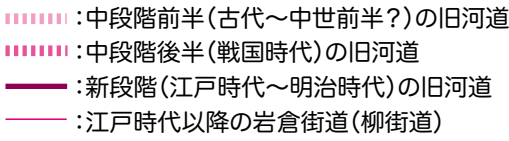


図5 岩倉城跡付近の歴史景観 (1:25,000)

あり、そこには何らかの人工的な改変を伴う可能性が指摘されよう。その可能性を拡大解釈すれば、岩倉城主郭付近の五条川は、古くに形成された凹地を活用して意図的に主郭東側に南流させ、北側の旧河川跡と西側の旧河道Eの河川敷を利用して堀を巡らせた可能性が高いと考えられよう。

（３）岩倉城の周辺の景観復元

上記の分析結果を整理すると、2本の旧河道Eと五条川に挟まれた中洲状微高地に、河川跡や河川敷を利用して堀を巡らせた岩倉城主郭が構築され、その南側に武家屋敷が展開し、西側に寺院が散在したといえる。以前に根拠は薄いものの五条川東側にも武家屋敷の存在を想定していたが、今回改めてみると武家屋敷の存在は疑わしくなった。代わりに真光寺（心光寺）や大円寺などの寺院とそれに付随する市場が展開したと考えておきたい。

そして旧河道を隔てて北側に証法寺・龍潭寺・松栄寺など寺院集中地区が存在し、さらに旧河道を隔てた位置に堀を巡らせた区画を有する御山寺遺跡が存在している。これらを直接的に岩倉城下と位置づけることは難しいだろうが、意図的に配置された可能性は指摘できるだろう。連続する中洲状地形の北側を寺院と堀を巡らせた施設で北からの攻撃に対する備えを配置した、岩倉城の前哨地的な意義があったかもしれない。

今回は検討する材料が少ないためあまり言及できないが、岩倉城の南側の岩倉市大山寺町付近で五条川が不自然に西折して流れることも、

岩倉城の防備に関わるものであるかもしれず、この五条川が西折する時期とその要因を明らかにする必要があるだろう。

（４）結語

地籍図と表層地形解析から岩倉地域の旧河道の変遷を検討し、岩倉城に関わる河川との対応関係を検討した。このことにより、岩倉城築城に対するこれまでの理解が変更される結果となっている。旧河道の変遷や時期比定については推測の部分が大きく、確実なものとするにはさらに資料の蓄積することが重要である。そしてそれに関わる岩倉城の解釈ももっと煮詰めたものにする必要もあるだろう。

これまで尾張平野の大規模な河川改変の記録は江戸時代にならないと確認できていない。しかし、岩倉城築城に際して河川を人工的に維持された可能性があることは、河川に関して積極的に手を加えるようになるのは室町～戦国時代まで遡る可能性がでてきたことを意味する。この自然地形に対する改変の程度についてはさらなる検討が必要であろうが、室町・戦国時代の河川改変は下津や清須の分析でも確認されている。拠点的な集落・城郭では河川に対してそれなりの規模を持つ土木工事が行われていたことが想定される。（鈴木）

【謝辞】

本論を作成するにあたり、図面作成では前田弘子氏・鈴木好美氏・知立造園株式会社にご支援・ご協力をいただいた。記して厚くお礼申し上げます。

引用・参考の報告書・文献

- Allen, J.R.L., 1963, The classification of cross-stratified units, with notes on their origin. *Sedimentology*, v.2, 93-114.
- 石黒立人 2006 「伊勢湾周辺地域における弥生時代の平野地形について」『研究紀要第7号』財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター
- 石黒立人編 2011 『御山寺遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第167集
- 伊藤秋男 1994a 『愛知県西春日井郡西春日町 高塚古墳発掘調査報告書』西春日町教育委員会 54P.
- 伊藤秋男 1994b 『高塚古墳発掘調査報告書』南山大学大学院考古学研究報告 第2冊 南山大学高塚古墳発掘調査会 54P.
- 伊藤秋男 2010 『地籍図で探る古墳の姿（尾張編）—塚・古墳データ一覧—』人間社 233P.
- 金子健一 1990 「戦国城下町岩倉の復元的考察—調査の成果と地籍図の検討から—」『年報 平成元年度』118-130 愛知県埋蔵文化財センター
- 鬼頭 剛 1999 「三ツ井遺跡の古環境解析」『三ツ井遺跡』118-146 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第87集
- 鬼頭 剛 2009 「下津新町遺跡における地下層序と表層地形解析」『下津新町遺跡』122-127 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第159集
- 鬼頭 剛 2011 「御山寺遺跡の地下層序と表層地形解析」『御山寺遺跡』224-234 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第167集
- 鬼頭 剛 2013 「稲沢市 下津宿遺跡の地下層序と地形解析」『下津宿遺跡』311-316 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第175集
- 鈴木正貴 2006 「織田信長の都市づくりの源流—尾張守護所の景観復元研究から考える—」『守護所と戦国城下町』高志書院
- 田中伸明編 1999 「三ツ井遺跡」愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第87集 196p.
- 松原隆治編 1992 『岩倉城遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第38集